

的理由を知るに苦しむ。(三九、一一)

集會と運動 集會の勢力に由らざれば神と人との盡す能はざる者は禍ひなるかな、獨り眞理の燈臺となりて世の暗黒を照らす能はざる者は禍ひなるかな、街に聲高らかに叫ぶにあらざれば人を救ふ能はざる者は禍ひなるかな、靜かなる、深き、内なる信仰を懷き得ざる者は禍ひなるかな、集會又集會、運動又運動、茲に於てか余輩は主キリストの言を想出さざるを得ず、神の國は顯はれて來る者に非ず、此所に視よ、彼所に視よと人の言ふべき者にあらず、夫れ神の國は汝等の衷に在りと。路加傳十七章廿、廿一節。(四〇、三)

死魚の類 戦争始まれば盛に戦争を謳歌し、平和成れば直に平和協會を興す、是れ今日の基督信者の爲す所なり、言あり曰く「生ける魚は水流に逆ひて遊び、死せる魚は水流と共に流る」と、曾て一回も世に逆ひしことなく、常に其潮流に循て往來する我國今日の基督信者は死せる魚の類にあらずして何ぞや。(四〇、六)

豫想と事實 余輩は教會は神を信ずる者が神を拜する所なりと思へり、然るに

その社交的俱樂部の一種なるを發見せり、余輩は教會は愛を交換する所なりと想へり、然るにその勢力争奪の場所なるを發見せり、愛なし、又敬虔なし、而かも之を教會と名づく、余輩は茲に於てか神と愛とを教會以外に於て求めざるを得ざるに至れり。(四〇、六)

教會と信仰 昔時、羅馬加特利教會は唱へて言へり、教會なくして信仰あるなし、教會を離れし者は神に棄てられし者なりと。

然るに勇敢なるルーテルは獨り立て曰へり、「否然らず、教會なくとも信仰はあり、神は教會に棄てられし者をも取り上げ給ふ」と、茲に於てかプロテスタント教會は起りたり。

然るにルーテル死して四百年後の今日、彼を以て始まりしプロテスタント諸教會は昔時の羅馬加特利教會に倣ひ教會と信仰とを同一視するに至れり。

茲に於てかルーテルは再び起らざるべからず、然り數多のルーテルは既に世に出たり、神を専有せんとする者は終に神を失ふ、今日のプロテスタント教會も亦、昔時の

羅馬加特利教會の如くに、其僭妄の故を以て活ける眞の神を失ひたり。(四〇、六)

教會員と基督信者 組合教會員は居る、基督信者は居らない、メソヂスト教

會員は居る、基督信者は居らない、「日本基督」教會員は居る、基督信者は居らない、
 獨立教會員は居る、基督信者は居らない、浸禮教會員は居る、基督信者は居らない、
 「聖公會」員は居る、基督信者は居らない、教會員はいくらでも居る、併しキリスト
 を信じ彼のために苦しむ者は居らない、教會のために盡せば同情と報酬とがある、
 キリストのために盡したればとて何の同情も報酬もない、然り、若しキリストのた
 めに十字架に上げらるゝことあるも今の教會と教會員とからは唯だ嘲笑と罵詈と讒
 誣とがあるのみである。(四〇、八)

見捨られたる教會 キリストを去て教會を去る者あり、キリストに就て教會

を去る者あり、今や不信者は教會を去り、信者も亦之を去る、冷かなる者去り、熱
 き者も亦去る、而して微温き者のみ残る、神、ラオデキヤの教會に言はしめて曰く
 汝、既に微温くして冷かにも有らず、熱くも有らず、是故に我れ汝を我が口より吐

出さんと。黙示録三章十六節。(四一、二)

近世の二名士 數十年に渉る深き研究の結果として『教會と近世思想』なる書を

著はし斷然教會を去りし者を英國の名士ヴィンヂアン氏となす、キリストに深く接す
 るの餘り『基督教國の攻撃』なる書を著はし、教會を離れて福音の眞髓を世に傳へん
 とせし者を丁瑪國の思想家キルケゴールとなす、前者は教會を外より見て之を去り、
 後者は中より覗いて同じく之を去れり、余輩はヴィンヂアン氏の誠實を愛す、然れど
 もキルケゴールの熱信に服す、教會は去るべし、然れどもキリストは去るべからず、
 余輩はキルケゴールの徒の基督教世界に益々多からんことを願ふ。(四一、二)

教會と信仰 教會を離れて信仰を維持する能はずと云ふ、然り、或る種の信仰

は教會を離れて之を維持する能はざるべし、教會的信仰、是れ教會を離れて維持す
 る能はざる也、然れども昔し在して今尚ほ在し給ふキリストの信仰は人の作りし教
 會を離れて容易に之を維持するを得るなり、彼等を世に傳ふる教會なかも、支那の
 聖人は今尚ほ東洋數億萬の民を風化しつゝあるにあらずや、ダンテを世に傳ふる教

會は何處にあるや、而かも彼の感化は日々に益々世界に遍あまねきにあらずや、況してキリストをや、キリストにして若し教會の手を藉りずして其信者の信仰を維持する能はざらん乎、彼は孔子ダンテに劣る者なり、教會はキリストを庇保せんとして反て彼を貶おとす者なり、我等は確かに今の教會を離れてキリストに於ける我等の信仰を維持するを得るなり。(四一、二)

宗教と教會

福音は自由なり、故に教會を作らず、福音、宗教と化して始めて教會現はる、教會は宗教の産なり、故に宗教廢すたれて福音の再たび世に臨む時に教會も亦廢たる、教會の衰微は福音復興の兆なり、賀すべき哉。(四一、三)

神意と人意

人は止まらんとし、神は動かんとし給ふ、人は固結せんとし、神は溶解せんとし給ふ、人は制定せんとし、神は産出せんとし給ふ、神、自由の福音を賜へば、人は之を化して制度の宗教となし、神、愛の兄弟を生み給へば、人は之を收容して規則の教會を作る、曾てバベルの塔を築きて神の震怒を招きし人は今尙ほ條規の教會を設けて同じく聖意せいいに戻りつゝあり、慎まざるべけんや。(四一、三)

武士道と宣教師

聞く眞の武士道は敵に勝つの道に非ず、人に對し自己を持するの道なりと、清廉、潔白、寛容、宥恕、勝つも立派に勝ち、負けるも立派に負けるの道なりと云ふ、若し然らんに武士道の外國宣教師に由て傳へられし我國今日の基督教に優まさるや萬々なり、宣教師的基督教は何よりも先づ成功を欲望す、多數に信徒を作らんとし、大なる會堂を建てんとし、社會に勢力を植ゑんとす、聖せいく失敗する祝福の如きは其全然解し得ざる所なり、余輩はナザレのイエスの弟子として又日本武士として、外國宣教師と其傳ふる宗教とに反對する者なり。(四一、四)

外國傳道

ペテロ劔を抜きてイエスの身を護らんとせり、イエス彼を誡めて曰く「汝の劔を鞘かぶに納めよ、凡て劔を取る者は劔にて亡ぶべし」と、英國と米國と、獨國と露國と、其他すべての所謂基督教國は大軍を備へ、大艦を浮べて基督教的文明を護ると稱す、而して基督教會なるものありて、軍旗を祝福し、勝利を祈り、其保護の下にキリストの福音を異教の民に傳へんと欲す、世に奇怪の事多しと雖も、今の所謂基督教國の外國傳道の如きはあらざるなり。(四一、六)

十字架の濫用 十字架を軍旗に織り、其下に進む基督教國の軍隊あり、十字架を信仰箇條に編み、之を旗幟として其後に従ふ基督教會の信徒あり、而して己を棄てその十字架を負ひてキリストに従ふクリスチャンあるなし、十字架は表號としては迎へられ、事實としては斥けらる、十字架を護持する者は多し、之を荷擔する者は少し、今や十字架は魔除まよけの一種と化して其眞義は全く忘却せられたるが如し、悲むべきにあらずや。(四一、六)

制度の排斥 余輩が教會に反對するは其腐敗を嫌ふてにあらず、制度其物を惡くんでなり、制度は規則なり、愛の自由にあらざるなり、制度は如何に完全なるも神の國を作る能はざるなり、制度の完全するを待て教會は何時いつまでも完全なる能はざるなり、制度を廢し、愛に頼たりて教會は始めて完全なるを得るなり、教會が純然たる兄弟的團體と化するまではキリストの聖旨みことばは此世に行はれざるなり。(四一、八)

無情の宣教師 外國より我國に來り、父祖の宗教を棄てよと我等に迫る、若し誤謬ならんには我等は之を棄つるに躊躇せざるべし、然れども其如何に辛慘の事な

る乎は彼等宣教師の知らざる所なるが如し、舊來の習慣と絶たざるべからず、父母親戚と争はざるべからず、宗教を變ふるは靈魂を更ふるが如く難し、而かも輕々しく宗教の變更を我等に勸む、彼等宣教師の無情も亦甚しからずや。

而かも我等に宗教の變更を迫る彼等宣教師は彼等の狹隘なる教會をすら棄つる能はざるなり、彼等は自身何の棄つる所なくして、我等にすべてのものを棄てよと迫るなり、無情なる宣教師！ 彼等は我等が荏弱じんじやくを體恤たいしゆること能はざる祭司しきの長の如き者なり、彼等は我等を助くる能はず、故に主は彼等に由りて我等に顯はれ給はざるなり。希伯來書四章十五節參考。(四一、八)

偶像の交換 金や銀や木や石を以て作りたる偶像を棄てよと云ふ、然り、我等は之を棄つべし、然れども我等も亦彼等宣教師に對して我等の要求なき能はず、我等は彼等に言はんと欲す、「汝等も亦汝等の偶像を棄てよ、今は既に廢りたる汝等の信仰箇條を棄てよ、人の作りたる汝等の教會を棄てよ、汝等の洗禮晚餐式を棄てよ、汝等の聖十字聖麩法衣等を棄てよ、是れ皆な偶像の類なればなり、我等にのみ偶

像排棄を勸むる勿れ、汝等も亦汝等の偶像を排棄せよ、己の爲さざることを人に勸むる勿れ、我等は主イエスキリストの名に由り是等の要求を汝等に爲して憚らざるなり」と。(四一、八)

預言者の迫害者——教會

教會が斥けて顧みざりしスピノザは世界第一流の哲學者なりき、教會が凌辱して止まざりしトマス・ペインは熱誠なる人類の友なりき、教會が無神論者の首と稱びしヴォルテヤは佛國稀有の敬神家なりき、教會が其敵と見做せしダーウキンとスペンサーとは近世最大の思想家なりき、聖ステパノ、當時の猶太教會の信徒を責めて曰く、

汝等の先祖等は孰れの預言者をか窘迫さざりし(行傳六章五十二節)

と、余輩も亦同一の言を以て今の教會を責めざるを得ず、教會に排斥されず、教會に敵視せられざりし第一流の科學者、哲學者、思想家、慈善家は何處にある乎、教會は其始めより今日に至るまですべての預言者の迫害者たるなり。(四一、八)

イエスと教會

イエスは神の國を建んとせり、然れども其弟子等は此事を爲す

能ずして之に代へて教會を建たり、彼等はイエスに效ふ能はざりき、故に彼を神と崇め奉りて遠くより之を拜したり、斯くて彼等は教會を持続して今日に至り、イエスを主よ主よと呼びて其旨に従はざるなり。

然り、イエスは神なり、神なるが故に従ふべき者なり、そは従ふべからずして單に拜すべき者は神に非ずして偶像なればなり。(トマス・デビッドソンの思想に依る)。(四二、二)

福音と基督教

キリストの福音が此世と和合せし者、之を基督教と稱す、其制度となりて現はれし者が基督教會なり、其學問となりて修められし者が基督教神學なり、二者の煩雜なるは和すべからざる者が相和せしに因る、福音は透明にして水晶の如し、福音、濁世の偽和する所となりて教會と神學との必要起りたり、福音にして其固有の單純に復せん乎、教會と神學との必要は失せて預言者エレミヤの言は事實となりて顯はるべし、曰く

其時、人、各自、其隣人と其兄弟に教へて、汝、エホバを識れと亦言はじ、そは小より大に至るまで悉く我を識るべければ也とエホバ言ひ給ふ(耶利米亞記三十一章三)

十四節。(四二、三)

満全の幸福

基督教を信ずるは幸福なりき、然れども教會に由て之を信ぜしは不幸なりき、若し教會に由らずして基督教を信ずるを得しならば満全の幸福なりしならん、我等は不幸中の幸福に與かりしのみ、基督教は信ずべかりき、然れども教會には入るべからざりしなり、己れ人に爲られんと欲する事は亦人にも其如く爲よ、我等は他人をして満全の幸福に與からしむべき也。路加傳第六章三十一節。(四二、二)

教會と國家

教會、國家と相和して教會は腐れ國家は衰ふ、教會、國家と相對して教會は榮え國家も亦榮ゆ、教會は素と是れ church militant なり、「對壘せる教會」と稱す、此世に對して常に詰責の態度に居り、之を警め、之を導くべき者なり、教會、國家と和するは、監査役、重役と和するが如し、會社は是れがために傾く、國家も亦終には是がために倒れざるを得ず。(四二、三)

悪魔を斃すの途

悪魔は之を後門より攻めて降す能はず、正々堂々として之を正門より攻めて征服するを得べし、世と和するは世を化するの途に非ず、世を化

せんと欲せば之と闘はざるべからず、自から世に紛れ入り、其一人となりて之を化せんと欲すれば、自身、終に其化する所となる、基督教會は今日まで幾回となく、世と和らぎて終に世の化する所となりたり、而して今も猶ほ奇計なりと稱して同一の愚を繰返しつゝあり、悪魔のゴリヤテは正面より之に對する信仰のダビデの磔を以てのみ能く之を斃すを得るなり。(四二、三)

式又式又式

人に見られんと欲する此世の人は式を以てするにあらざれば何事をも爲す能はず、彼等は式を以て信者となり、式を以て信仰を繼げ、而して終に式を以て墓に葬らる、式、式、式と、彼等の教師なる者は主として式を司る者なり、式にして廢せられん乎、教師は用なきに至るべし、式は外の事なり、衷の事に非ず式は事を定めず、又心を潔めず、意志のみ能く事を定め、神の靈のみ能く心を潔むるなり、誠實の人の式に重きを置かざるは、その主として肉の事、社交の事たるを知ればなり。(四二、六)

明白なる一事

明白なる一事は是れなり、即ち、教會の既に世を救ふの力なき

事是れなり、其死期は既に近づけり、其壁にはメネ、メネ、テケル、ウバルシンの文字書かる、米國の思想家エルバート・ハッバード氏曰く「葬儀師は今や既に教會の門に在り」と、今やキリストの福音は教會に由りてよりは教會を離れてより深くより廣く傳へられつゝあり、中古時代の遺物として残る教會は光明の進昇と共に消へ失せつゝあり、余輩は教會を誣はず、然れども其用の今や將さに終らんとしつゝあることを世に告げずんばあらず。但以理書五章廿五節以下。(四二、六)

教會の本性

教會は我等を援けんために我等に來らず、我等をして彼女自身を

助けしめんがために我等に臨む、其教權なる者は我等を威嚇するための者にして我等を慰藉するための者に非ず、教會は溫柔を装ふ大なる壓制家なり、良媼の如くに見ゆる女夜叉なり。(四二、九)

キリストと教會

彼等は言ふ「盛んなり盛んなり」と、然れどもキリストは其

弟子等に曰ひ給へり、

汝等散りて各人其屬する所に往き、唯、我一人を残さん、然れど我れ獨り在るに

非ず、父、我と偕に在るなり

と、而して獨り在りしキリストは萬世に無數の友を得、「盛んなる」今の教會は常に其衰頹を歎じて歇まず、キリストは失敗の成功を教へ給へり、而して今の基督教會なる者はキリストの福音を傳ふると稱しながら常に成功の失敗を示しつゝあり。約翰傳十六章廿二節。(四二、一〇)

精神と制度

精神、制度と化して死す、是れ歴史の法則なり、モーセの精神は

猶太教と化して死し、キリストの精神は基督教と化して死し、ルーテルの精神はルーテル教會と化して死し、ウエスレーの精神はメソヂスト教會と化して死せり、其他すべて斯の如し、依て知る、モーセの敵はエジプト人、アマレク人、カナン人等にあらざして、彼の國人にして彼を崇拜せしユダヤ人なりしことを、又キリストを殺せし者はバリサイの人又は羅馬人にあらざして、彼を主よ主よと呼びまつりし基督信者なりしことを、制度は精神の屍體なり、イエスを教會の首長として仰ぐものこそ眞に彼を十字架に釘けし者なれ。(四二、一一)

無教會主義の利害 余輩の無教會主義は害ありと云ふ者あり、又利ありと云ふ者あり、然れども余輩は害ありと云ふ者のために之を唱へず、利ありと云ふ者のために之を道ふ、故に害ありと云ふ者は之に耳を傾くるを要せず、利ありと云ふ者のみに之に聴く可し、人は悉く一様ならず、彼は自己を模範として他を審判^{さはん}く能はず、無教會信者をして無教會信者たらしめよ、彼等は又教會信者の教會信者たるを妨げざるべし、教會は信仰上の細事なり、重要事に非ず、此事に關して人は各自その選む所に從て可なり。(四三、四)

無教會主義の證明者(教會其物) 無教會主義の理由を知らんと欲する乎、之を余輩に問ふを要せず、直に教會其物に就て視るを得べし、其教師の嫉妬と反目と排擠^{はいせい}とを見よ、其信者の奪合^{とらひあひ}を視よ、其教會員の不義と不正と不實と不信を視よ、然らば余輩に問ふことなくして無教會主義の理由は自づから明かなるべし、教會其物が無教會主義の最も力ある證明者なり、余輩の全力を以てするも之に勝さりて有力なる證明を供する能はざるなり。(四三、五)

無教會信者の勃興

宣教師と教會信者とは曰ふ、余輩が無教會主義を唱へしが故に日本國に無教會信者起りたりと、否らざるなり、日本國に無教會信者が勃々として起りつゝあるが故に余輩の唱ふる無教會主義が聽かるゝなり、神は無教會信者を起し給ひつゝあり、而して又余輩をして無教會主義を唱へしめ給ふ、故に余輩にして若し此主義を唱へざらんか、路傍の石は起て號呼^{ごうこ}ぶべし、教會は今や總掛りとなりて此主義を抑壓せんとするも能はざるなり。路加傳十九章四十節。(四三、五)

教會信者

彼等はキリストのために熱心を起さず、自己の教會のために著るしく之を起す、彼等は人が罪を去てキリストに來りしを聞て喜ばず、自己の教會の會員の増加せしを聞て喜ぶ、彼等は純然たる黨人なり、共に福音を語るに足らざる者なり。(四三、五)

諸聖と教會

聖ヤコブは曰へり、人は善行に由て救はると、聖パウロは曰へり、人は信仰に由て救はると、聖ヨハネは曰へり、人は兄弟を愛するに由て救はると、ヤコブに循^{したが}ひて羅馬天主教會ありたり、パウロに循^{したが}ひてプロテスタント諸教會あり

たり、而してヨハネに循ひて教會の必要なきに至らん、ヨハネの福音書并に書翰の(短き疑はしき第二書を除きて)唯の一回も教會なる文字を用ひざるは特に注意すべきことなり。(四三、九)

歴史及文學に關する所感

美文と名論

文の美なるを要せず、想の美なるを要す、論の高妙なるを要せず、目的の確實なるを要す、之を平文字に譯して美ならざる文は美文にあらず、之を實地に應用して適切ならざる論は名論にあらず、美文たり、名論たり、是れ皆清き偽なき心より湧き出るものなり。(三四、一)

ダニユーブ兩岸の民

同一の黄色人種に基督教を供すればコスート、ヨルカイを出せし洪牙利國あり、之に之を供せざれば「東方の病人」たる土耳其國あり、二

者等しく歐洲に在て其物質的文明に浴するもの、而かも一つは基督教を受領せしが故に世界的勢力たり、他は之を拒絶せしが故に僅かに亞細亞的勢力たるに過ぎず、吾人眼をダニユーブ河邊に注ぎ、其兩岸に住する二國の民を比對し見て、吾人脚下の状態に思ひ及ばざるを得ず。(三四、五)

東西兩洋の別

西洋歴史より基督教を取り除きて見よ、是れ一個の東洋歴史たるのみ、其民は君に盲従し、僧侶を盲拜し、意志なき、理想なき、白色の東洋人たるのみ、西洋、東洋の別は洋の東西の別に非ず、又白色黄色の別にあらず、基督教と儒教との別なり、聖書と論語との別なり、吾人は洋の東方に在て尙ほ西洋人たるを得るなり。(三四、五)

無益の文學

第一に貴きものは精神なり、其次に貴きものは智識なり、我等執筆の業に従事する者は、若し精神を傳へ得ずんば智識を供すべきなり、然るに精神をも傳へ得ず、智識をも供し得ずして、たゞ徒らに人物評又は世間談に筆を弄するが如きは、是れ無益の文學なり、斯かる文學は之を印刷に附する紙の價值をさへ有

せざるものなり。(三六、四)

犬を慎めよ 汝等犬を慎めよ(腓立比書三の二)、當代の所謂る批評家なる者を

慎めよ、聲ありて實なき者を慎めよ、毀つのみにして建て得ざる者を慎めよ、螫すのみにして癒し得ざる者を慎めよ、汝等彼等たる勿れ、汝等彼等に聞く勿れ、其文に目を曝す勿れ、恐くは彼等汝等の靈魂を殺し、汝等は餓ゆるのみにして飽くこと能はざらん。(三六、四)

思想の輕蔑

純潔なる思想は書を讀んだのみで得られるものではない、心に多くの辛い實驗を経て、凡ての乞食的根性を去つて、多く祈つて、多く戦つて、然る後に神より與へられるものである、之を天才の生産物と見做すのは大なる誤謬である、天才は名文を作る、然かも人の靈魂を活かすの思想を出さない、斯かる思想は血の涙の凝結體である、心臓の肉の斷片である、故に刀を以て之を斷てば其中より生血の流れ出るものである、故に未だ血を以て争つたことのない者の到底判分することの出来るものではない、文は文字ではない、思想である、爾うして思想は血

である、生命である、之を軽く見る者は生命其物を輕蔑する者である。(三六、五)

文を得るの法

文の無さを悲まず、之を以て表彰はすべき想のなきを悲む、想のなきを悲まず、想を産むための信なきを悲む、信あらん乎、文あらん、我は文を得んがために筆に到らずして祈禱の座に走らん。(三七、四)

歴史の中樞

我れ史を繕きて、國は興きて又亡び、民は盛へて又衰ふるを讀み、唯見る一物の時代の敗壞の中に在て巍然として天に向つて聳ゆるあるを、キリストの十字架是れなり、世は移り人は變るとも、十字架は其光輝を放ちて止まず、萬物悉く零碎に歸する時に是れのみは残り残りて世を照らさん、十字架は歴史の中樞なり、人生の依て立つ盤石なり、之に依るにあらざれば鞏固なることあるなし、永生あるなし、十字架を除いて他は皆な悉く蟬蛻なり、キリストの十字架のみが窮りなく存つ者なり。(三七、五)

人の怒と神の義

人は利のために争ふ、而かも神は人をして彼(神)の正義を世に行はしめ給ふ、歴史は利益の衝突なり、而かも之と同時に又正義の遂行なり、

神の指導の下に人の怒も終に神の義を行ふに至る、争闘は凡ての手段を以て之を避けざるべからず、然れども人の強ひて之を開くに及んで我等神を信ずる者は其結果を懼れざる也。(三七、八)

文明と基督教

文明は肉の事なり、基督教は靈の事なり、故に文明と基督教との間に深き關係あるべからず、基督降世以前の希臘は人類が會て達せし最高の文明に達せり、回々教を信ぜしムール人は其文明に於て遙かに當時の基督教的國民に優越せり、伊太利の文學復興は其基督教が腐敗の極に達せし時に起れり、之に反して基督教を産せし猶太國は所謂る文明國には非りし也、英國に清教徒起りてより其美術と文學とは頓に衰退せり、基督教徒は所謂る文明の民には非るなり、エホバ、預言者ザカリヤを以てイスラエルの民に告げて曰ひ給はく、シオンよ我汝の人々を振起してギリシヤの人々を攻めしめんと(撒加利亞書九章十三節)、シオンは信仰を表し、ギリシヤは文明を代表す、而してシオンは常にギリシヤの敵なり、吾等今日の基督信徒も亦屢々振起して文明の人々を攻めざるべからず、吾等は自今再び「文

明と基督教との關係」を口にすべからざるなり。(三八、八)

基督教國

世に基督教國なるものあるなし、基督教國なるものあるべからず、キリスト曰く我國はこの世の國に非ずと(約翰傳十八章三十六節)、基督の國はこの世に建設さるべき性質のものに非ず、之に國境又は兵備又は政府又は警察又は法律あるべからず、基督の國は愛の國なり、自由の國なり、靈の國なり、今は信徒各自の心の衷に存して後に世界的王國として顯はるゝ者なり、吾人は基督教國の名に眩惑せられて今の「基督教國」なる者に傲ふべからざるなり。(三八、八)

國家間の戲嬉

言あり曰く、人は小兒の成長せし者に外ならずと、余輩は更らに此言に加へて曰ふ、國家は成長せる小兒の集合體に外ならずと、甲、乙と結ばんとすれば丙は丁と結びて之に對せんとす、利慾と嫉妬と猜疑とは同盟を作り又同盟を壞つ、戲嬉は小兒の間に行はれ、亦國家の間に行はる、之にたゞ大小の別あるのみ、天に座する者笑ひ給はん、主、彼等を嘲けり給ふべし。詩篇二篇四節。(三八、八)

支那の破壊者

露人は北より暴力を以て支那の國境を侵して之を破壊せんとせ

り、英人は南より盛に印度産の阿片を輸入し支那人の意氣を消耗し以て華國壞亂の基を開けり、露人は外より、英人は中より我が可憐の隣人を侵害せり、吾人は露人の横暴を憤ると同時に亦英人の殘虐を責めざるべからず。(三八、八)

ピューリタンの消滅 余輩はピューリタンを尊敬す、彼は實にプロテスタント教の精華なりき、彼れありしが故に地球の表面の一變せしことは余輩の充分に認むる所なり。

然れども悲哉、ピューリタンは今や米國より其跡を絶ちつゝあり、其本據の地たりし新英洲すら今やピューリタンの所有に非ず、ピューリタンは今や米國の主人公に非ず、其政府も議會も、然かり、多くの場合に於ては其學校も教會もピューリタン以外の者の支配する所となれり、我等が米國を迎へしはピューリタンの米國を迎へしなり、然るに今やピューリタンはなきに等しき者となりて、米國は我等に取りて精神的に全く要なき者となれり、我等は我等の師たりしピューリタンと共に米國今日之の墮落を歎げく者なり。(三九、九)

文士と神學者

道は之を神學者に學ぶも可なり、然れども其傳播の方法は之を文士に學ぶべし、ブラウニング、カーライル、ホキットマン等に學ぶべし、彼等は堅き心と一本の筆の外に何の頼る所あらざりき、而かも眞理を廣く世界に傳へて萬人の心に歡喜を供せり、近世に於ける昔時の預言者の繼承者は教會の勢力を後循うしろたてに取りて高壇より叫ぶ説教者にあらず、神と自己とを除いて他に頼む所なき獨立の文士なり。(三九、一一)

大詩人に聴け

説教集と宗教書類とをのみ讀む勿れ、時に大詩人の詩集を繙きて大に自由と獨立の精神を養ふべし、宗教は人を因循、姑息、怯懦になし易し、舊習に拘泥こびましめ、古例に盲從せしめ易し、神が時々大詩人を世に送り給ふは古きエジプトの束縛を慕ふ奴隸の民を覺醒せんがためなり、米國宣教師に聴く勿れ、米國人ワルト・ホキットマンに耳を傾けよ、彼に倣て

Nature without check, with original energy

元始の精力を以て、まよ碍げらるゝことなく天真有の儘

を語れよ、彼は又言へり

The immortal poets of Asia and Europe have done their work and passed to other
[spheres,
A work remains, the work of surpassing all they have done.

亞細亞と歐羅巴の不朽の詩人は既に其業を終へて他界に去れり、

今や一事業の存するあり、彼等が爲せしに優さる事業を爲すことは是れなり、

然り、亞細亞と言ふ勿れ、歐羅巴と言ふ勿れ、亦亞米利加と言ふべし、詩人と言ふ勿れ、亦宗教家と言ふべし、我等は詩人の教訓に従ひ、スボルジョン、ピーチャー、ムーデー等が爲すを得ざりし事業を此地に於て爲すべきなり。(三九、一一)

思想の由來

思想は頭腦より來らず、心情より來る、心情より來らず、行爲より來る、行て感じ、感じて想ひ、想ひて思想となりて口舌に上り、筆尖に顯はる、思想の由て來るや遠し、而して何れの場合に於ても勇敢なる行爲に由らずして高潔なる思想は出來らざる也。(四〇、六)

國威と貧困

我れ某軍港に傳道し、巨艦の工を竣ふるを見たり、我れ之を仰ぎ

見て曰く、「盛なるかな日本帝國」と。

我れ某地方に傳道し、多くの茅舎陋屋を見たり、我れ之を望み見て曰く、「憐むべきかな我が國」と。

此民にして此艦を造る、以て知る國威の宣揚は必しも民の幸福の兆にあらざること。(四〇、九)

神の日本國

日本國は日本人の國なりと云ふ、然り、外國人に對して日本國は洵に日本人の國なり、然れども神に對して日本國は日本人の國にあらざる也、日本國も亦神の國なり、日本人は富士山を築かざりし也、日本人は琵琶湖を穿たざりし也、日本人は櫻樹を造らざりし也、日本人は日本國を神より與へられしに過ぎず、眞正の愛國心は外敵に對して此國を護らんとするに止まらず、神に對して之を聖めんとす、之を聖國に類するが如き者となして、神の榮光を顯はさんとす。(四〇、一〇)

幸福なる朝鮮國

聞く朝鮮國に著しき聖靈の降臨ありしと、幸福なるかな朝鮮國、彼女は今や其政治的自由と獨立とを失ひて、其心靈的自由と獨立とを獲つ、

あるが如し、願ふ、曾ては東洋文化の中心となり、之を海東の島帝國に迄及ぼせし彼女が、今や再び東洋福音の中心となり、其光輝を四方に放たんことを、神は朝鮮國を輕蔑め給はず、神は朝鮮人を愛し給ふ、彼等に軍隊と軍艦とを賜はざるも、之に優りて更に能力強き聖靈を下し給ふ、朝鮮國は失望するに及ばず、昔時ユダヤが其政治的自由を失ひてより、其新宗教を以て西洋諸邦を教化せしが如く、朝鮮國も亦其政治的獨立を失ひし今日、新たに神の福音に接して、之を以て東洋諸國を教化するを得るなり、余輩は朝鮮國に新たに聖靈の降りしを聞いて、東洋の將來に就て大なる希望を繋ぐを得、併せて神の攝理の人の思念に過ぎて宏且大なるに驚かざるを得ず。(四〇、一〇)

詩人 詩人はポエテリスなり、ポエテリスは爲人なり、事を爲す人、是れ詩人たるなり、詩は風景を眺めて成らず、文を練て成らず、神を信じ、己に克ち、世に勝て成るなり、小説家を賤めよ、然れども詩人を賤むる勿れ、そは彼は夢る者に非ずして、闘て勝つ者なればなり。

多讀の害 多讀の害は寡讀の害に劣らず、多讀は人をして著者の奴隷たらしむ、多讀の人に獨立の思想乏し、フォルズマス、スペンサー等、獨創の人は多くは寡讀の人なりき、人は消化し得る丈けの食物を要するが如く、又同化し得る丈けの思想を要す、多見多聞必しも學者を作らず、我等は自我の主權を犯されざる限り他人の著書に目を曝らすべきなり。(四一、八)

文明の解 文明は蒸汽にあらず、電氣にあらず、憲法にあらず、科學にあらず、哲學にあらず、演劇にあらず、美術にあらず、人の心の状態なり、人を尊む乎、眞理を愛する乎、主義に忠なる乎、正義に勇なる乎、責任を重ずる乎、義務に服する乎、文明の程度は是等の諸問題に由つて決せらる、文明は人の靈魂に在り、裝飾と器具と便宜とに存せざる也。(四二、二)

讀書と智識 書を讀んで事を識る能はず、書は事を紹介し、又起想せしむるに過ぎず、事を行てのみ能く之を識るを得るなり、智識は實驗なり、所謂博學の士にして何事をも識らざる人多し、讀書家を識者と見るは非なり、余輩の知る最も無智な

る人は讀書の外、何事をも爲さざる人なり、百聞一見に若かず、千讀一行に及ばず、深く事物を識らんと欲して萬卷の書を涉獵するの必要一つもあるなし。(四二、二〇)

批評家と思想家

詩人ゲーテ曰く

誤謬を知覺するは眞理を發見するよりも易し、そは誤謬は表面に現はれて見るに易く、眞理は深く隠れて少數者のみ之を探らんと欲すればなり

と、世に千人の批評家あるに對して僅かに一人の思想家あるは之れがためなり、誤謬と缺點とは何人も之を見るを得べし、然れども眞理と美點とは神に恵まれたる少數の人のみ能く之を認むるを得るなり。(四二、七)

詩作

詩は成る、作るべからず、美き思想は美き言辭と共に臨る、文を練るを要せず、高く思ひて潔く行へば足る、詩は勇者の事なり、文士の業にあらず、敢爲以て何人も詩人たるを得るなり。(四二、九)

雜 感

余の望む所

余は余に人望なるものゝ少きを望む、然り、其全く無からん事を望む、余は世人がよく余の本性を看破し、余にして若し偽善者、惡人なりとならば、彼等が愼んで余に接觸せざらんことを望む、余は余と友誼を結ばんと欲する者の、先づ余の敵人の許を訪ひ、余に關する彼等の凡ての批評を聞き、然る後に余に來らん事を望む、余の性格を誤解し、余を以て理想的人物なりと信じ、余を崇拜し、然る後に余の彼等の意に適はざるを見て、余に對して罵詈雑言を極め、殆んど余の面に唾するの態度に出づるは、余に取て、亦彼等に取て決して利益多き事にあらず、余は岩間の櫻草の如く獨り自から樂しみ、獨り自から神が余に命ぜし事を就さんと欲する者なり、余は彼等が余を尋ね來るを須ゐず、余は彼等が余を不問に措て、余をして彼等の故に余の心を煩はしめざらん事を欲す。(三三、一〇)

名實の關係

名は實を作る能はず、名の上に實を建てんとする者は砂の上に家

を建る者なり、雨降り、大水出で、風吹きて其家を撞ば終に倒れてその傾覆大なり、先づ廣告を以て虚を風聴し、世の之を實とし受くるを待て、然る後に實を以て之に應ぜんとす、是れ智者の策なるが如くに見えて實は愚人の行爲なり、而かも世間此策に出づる者甚だ多し。(三三、一一)

批評家

批評せらるゝ者と成れよ、批評する者と成る勿れ、前者は或る物を社會に供せしが故に批評せらるゝなり、後者は何物をも供する能はざるが故にたゞ他人が供せし物に就て批評を加ふるのみ、二者の別は製作者と消散者との別なり、吾人何人も製作者となるべし、消散者となるべからざる也。(三四、一)

罵詈の危険

吾人は人の善を語て心に富を感じ、惡を述べて貧を覺ゆ、罵詈を繼續せんか、吾人は終に思想的に貧死するに至らん、罵詈時には義務ならざるにあらず、然れども罵詈に従事して吾人は大危険に臨むものなることを忘るべからざるなり。(三四、一)

神僕

余輩を援けんと欲するものは余輩に來れ、余輩に援けられんと欲する者は

余輩に來る勿れ、余輩は自身既に神の屬にして余輩のものにあらず、余輩について失望するもの多きは未だ余輩の宗教の何なるかを知らざるもの多きに因る、既に他人(神)の僕(奴隸)となりし者、彼れ争てか人の好意に投ずるを得んや、余輩が人を喜ばし得ざるは、余輩が余輩の主人を喜ばせんと欲するが故なり。(三四、一)

憤怒の害

憤怒は一時的發狂なり、精神を害ふのみならず、又腦を害ひ、胃を害ひ、心臟を害ふ、世に憤死するものあるは身に毒素を醸して自殺するに因る、吾人は怒つて害を他人に加ふるのみならず、又更らに大なる危害を吾人自身に加ふるなり、怒る者は愚人なり、彼は己れを鞭ち、他を責めんとして却て己れを罰しつゝあるものなり。(三四、二)

惡人の眞性

惡人とは神に恵まれざる者の稱なり、善人とは神に恵まれし者の稱なり、神の恩恵に富むが故に善人なる也、之に缺乏するが故に惡人なる也、惡人は貧者の一種也、彼ば憫むべきものにして憎むべきものにあらざる也。(三四、三)

日本

日本國は其政府にあらず、政府は日本の頭腦なり、日本國は其富士山にあ

らず、富士山は日本の頭角なり、日本國は琵琶湖にあらず、琵琶湖は日本の眼眸なり、日本國はまた其民衆にあらず、民衆は日本の手足なり、日本國は山にあらず、湖水にあらず、亦其民にあらず、日本國は精神にしてソールなり、吾人は先づ彼に忠實ならざるべからず、然らば彼に屬する總てのものに向て眞正に忠實なるを得べし。(三四、五)

皮相 彼等はコロムウエルに就て聽かんことを欲す、然れどもコロムウエルが主として事へしイエスキリストに就て聽かんことを欲せず、彼等はグラッドストンの政治に就て學ばんと欲す、然れどもグラッドストンの經綸を生みし彼の宗教に就て學ばんと欲せず、ラフ、エルの美術に倣はんとは欲すれどもラフ、エルの理想を求めんとは欲せず、彼等は到底皮相の民たるの譏そしりを免かるゝこと能はず。(三四、九)

師弟の關係 人は我に頼り我は神に頼る、故に我に頼るは神に頼るなり、我は我荷擔の重さを感じず。

* * * * *

我を師と稱ぶ者あり、然れども我にも亦我の師と呼ぶものあり、かくて我を師とする者は我の師とする者を師とするものなれば、我は彼等に師とせらるゝを懼れず。

* * * * *

月を仰ぐものは日を仰ぐ者なり、然れども月は夜を照らすための日の代表者たるに過ぎず、月の望む所は夜の一刻も早く過ぎ去て人々が直に榮光の日を仰ぐに至らんことなり。(三四、一〇)

私の證明者 我的證明者第一は我自身なり、我は己を欺かざらんと欲す、私の

良心にして我を許さん乎、我は衆人の猜疑する所となるも可なり。

私の證明者第二は私の神なり、若し彼にして我と偕に在さん乎、何人も我に逆ふ能はず、我は小なり、神は大なり、我れ神と協同して我一人は全世界よりも大なり。

私の證明者第三は私の事業なり、人に依ることなく、たゞ神にのみ頼みて私の就せし事業は我を神と人との前に義とする者なり、私の傳へし言葉に由て罪を悔ひ改めし者、私の宣べし福音に因て生命に歸りし者は私の冕かむりにして又私の喜よろこびなり、我を未

來の裁判に於て辯護する者は彼等なり、彼等の我を證明するありて我は大膽に神の審判の前に立つを得るなり。(三五、三)

余を毀ち見よ 余を毀ち見よ、然らば其時余の福音の光は揚らん、人が余を崇むる間は余の説く福音は崇められず、余が皆無に歸する時に余の救主の榮光は顯はるゝなり。(三五、五)

無理の要求 神とキリストを知らざる者より愛と善との多量を要求するは貧者

より金を要求するが如し、彼等は之を有せざるなり、故に之を興へざるなり、彼等に迫て之を要求するは彼等に關する我等の無識に因る、我等は宜しく彼等にキリストに顯はれたる神を示し、然る後に彼等よりキリストの愛を要求すべき也。(三六、一)

偽はりの教師 偽はりの豫言者とは淺く民の傷を醫し、平康からざるに平康、平康と言ふ者である(耶利米亞記六章十四節)、偽はりの傳道師とは人に悔改の苦痛を供せずして善美ならざる性來の彼等に向つて善美善美と言ふ者である、聖書の明瞭なる教旨に従へば性來のまゝなる人は天國に入ることとは出來ない(哥林多前書

十五章五十節)、再生の苦悶を経ざるも基督信徒たり得べしと教ふる者は偽はりの基督教を教ふる者である。(三六、一)

大惡人 衆人に惡人と見ゆる惡人は大惡人に非ず、大惡人の大惡人たる所以は彼が善人と見ゆるにあり、彼の言辭や婉なり、彼の風采や優なり、彼は紳士の如くに見ゆ、然り、彼は眞個の基督信者の如くに見ゆ、彼は劍を翳さず、彼の婉言の中に之を藏す、彼は多くの人に愛せらる、彼を惡魔なりと稱ふ者あれば世は擧て斯く言ふ人を排斥す、彼を眞性の惡人なりと認め得る者は聖靈の予ふる所の智慧と穎悟とを有つ者のみ、世に發見し難き者にして大惡人の如きはあらざる也。(三六、二)

無勢力の効力 我に勢力なきこそ幸なれ、我に勢力あらん乎、我が福音は勢力なきものとならん、福音の勢力は我の無勢力なるに由りて顯はる、この故に我は寧ろ欣びて自己の弱きに誇らん、是れキリストの能力我に寓らんとすなり。(哥林多後書

十二章九節。(三六、三)

我を憎む者 キリスト我に在り、我れキリストに在りて、我を憎む者はキリス

トを憎む者である(約翰傳十五章十八節)、爾うしてキリストを憎む者は今の世に於ても後の世に於ても決して繁榮ゆる者ではない、我は此世に於ける我の短かき生涯の經驗に由て此事の甚だ確かなる事實であることを曉つた。(三六、三)

最大の異端 最大の異端は兄弟を憎むことなり、其失敗と墮落とを喜ぶことなり、此異端以外にオルソドックス(正統教)あるなし、ヘテロドックス(異端教)あるなし、吾人は先づ第一にゼントルマンたるべきなり、而かして後に吾人の神學説を定むべきなり。(三六、四)

辯解の無効 世の我等に關する誤解を解かんと努むる勿れ、彼等は我等を誤解せんと欲す、故に之を解くは彼等の意志に反するなり、我等は我等の善を念ふ我等の友人に對して其誤解を解くべきなり、彼等は我等を正解せんと欲す、故に彼等は我等の辯解を聞いて喜んで之を受くるなり、ピラトと祭司の長の前に於けるキリストの沈黙は敵人の前に於ける辯解の不要と無効とを我等に教へ給はんがためならざるべからず。(三六、四)

淺薄の確證

深く學べよ、然らば汝等批評家たらざらん、深く感ぜよ、然らば汝等不平家たらざらん、眞理は謙遜なり、沈黙を愛す、宇宙は調和なり、喧噪を憎む、深く眞理の泉に飲み、近く宇宙の琴線と觸れて、我等輕佻たらんと欲するも能はざるなり、批評家たり、不平家たるは其人の淺薄なる確證なり。(三六、四)

一致の困難

若し日本今日の基督信徒にして一致せん乎、天下何者か之に當るを得ん、然れども教派分裂の弊を極むる歐米諸國の宣教師に由て道を傳へられし我國今日の基督信徒の一致は熊と獅子との一致を望むよりも難し、若し幸にして神の靈強く我等の中に動らさ、我等をして基督を思ふが如くに我等の國を思はしめ、外に頼るの愚と耻と罪とを覺らしめ給はば、一致は芙蓉の巔に臨み、琵琶の湖面に降りて、東洋の天地に心靈的一生面の開かるゝを見ん、然れども其時の到るまでは我等は今日の分裂孤立を以て満足せざるべからず、是れ或は我等が人に頼ることなくして神にのみ頼ることを學ばんがための神の聖旨なるやも知れず、我等は慎んで一致の到來を俟たん、神よ、願くは其日を早め給へ。(三六、四)

キリストと武士

人類の理想はキリストである、日本人の理想は武士である、而して武士が其魂を失はずして直にキリストを信ぜし者が余輩の理想である、キリストを信ぜざる武士は野蠻人である、町人根性を去らずしてキリストを信ぜし者は偽の信者である、而かも得難きは此武士的基督信者である。(三六、五)

殖財の福音

我は獨り富まんと欲はない、我は全國民と共に富まんと欲ふ、然り、全人類と共に富まんと欲ふ、他人の富を取て我が所有となすともそれは富ではない、他國の富を奪て我が國の所有となすともそれは富國ではない、新たに富を作つて之を人類の用に供して我は始めて富むのである、我は信ず、是れが富の増殖に關するキリストの心であることを。(三六、五)

我の大敵

我を神の如くに敬する者、豫言者の如くに貴ぶ者は終に我に叛き、我が面に唾し、我を我が敵人に付たし、我を十字架に釘ける者である、世に忌むべき、憎むべき、卑むべき、避くべき者の中に我が崇拜家の如きはない、彼の面にはイスカリオテのユダの相がある、彼が我に近づく毎に我は戰慄する、其時我は獨り

心の中に祈つて云ふ「神よ願くは我を我が崇拜家の手より救ひ給へ」と。(三六、五)

最善と最惡

最も善きことはキリストを信じ、彼に在りて善を爲すことなり、即ち彼に善を爲さしめらるることなり、其次に善きことはキリストに倣ひ、彼を眞似て善を爲すことなり、其次に善きことはキリストを知らざるも天然の聲に聽きて善を爲すことなり、更らに恕すべきは無智無識の結果、善を爲し得ずして恒に神の聖旨に反ることなり、然れども最も惡くして全然恕すべからざることはキリストを識り、聖書を研究し、神學を講じ、キリストの神格を論じながら、兄弟を憎み、其陥擠を計畫し、彼等の墜落するを見て心に喜樂を感ずることなり、神が最も憎み給ふ者の中に信仰篤くして(篤しと稱して)罪を犯す者の如きはあらず。(三六、八)

雷霆の聲

細き聲に聽かざれば耳を裂くに足るの雷霆の聲に聞かざるべからず、若し良心の聲にして威嚴を缺くに至らば、神は萬軍を起して教訓を宣べ給ふ、正義は竟に必ず此世に行はれざるべからず、戰鬥の聲を聞くにあらざれば眼を醒さざる國民は禍なるかな。(三六、一一)

戦争の意義 人は利のために戦ふ、然れども神は罰せんがために戦はしむ、國民は戦場に臨んで神の刑場に臨むなり、彼等は自國の罪を贖はんがために屠らるゝなり、同類相對して流血淋漓たる所は是れ貴族の淫縱と平民の偽善とが萬邦注視の前に於て裁判かるゝ所なり。(三六、一一)

最も恐るべき刑罰 神に逆ひたればとて其刑罰として直に病に罹り、貧に迫り、又は社會の地位を失ふものではない、否な、多くの場合に於ては身の境遇の改善は神を捨去りし結果として來るものである、神に逆ひし觀面の刑罰は品性の墮落である、即ち聖きことゝ高きことゝが見えなくなつて卑きことゝ低きことゝを追求するやうになることである、然しながら是れ最も恐るべき刑罰であつて、人に取て實は是よりも重い刑罰はないのである、爾うして此刑罰の殊に重い譯は之を受けし者がその刑罰たるを解し得ないことである、我等は神に祈て如何なる他の刑罰を受くるとも此恐るべき品性墮落の刑罰を受けざるやう勉むべきである。(三七、二)

我誌の創設者 『聖書之研究』誌をして在らしめし最も有力なる人はアマスト大

學前綜理故シロー先生なり、余輩は先生に依りて始めて基督教の何たる乎を知り、先生亦余輩に囑して日本國に歸て此福音を傳へしめ給へり、先生既に新英洲の青山に眠り、而して此誌、今や絶東の島帝國に在て先生の意志の幾分かを傳ふ、余輩は其缺點の總てを負ふべし、唯先生をして人として受くべき其すべての榮譽を擔はしめよ。(三七、三)

眞理の贖責り 語るための眞理に非ず、信じて行ふための眞理なり、記者たり、説教師たるの危険は語らんがために眞理を求めて信ぜんがために之を探らざるにあり、眞理は一たび心に沈み、再たび手より出づるにあらざれば、語るも何の益なきものなり、世に純眞理を供すると稱して、腦に受けしものを直に口又は筆に出す者は眞理を贖責するものなり、眞理の探求所は書齋に非ず、汗と涙との流るゝ活世界なり。(三七、四)

惡魔に對するの途 惡魔は之を説服する能はず、そは彼は彼れ以外に眞理あるを信ぜざればなり、之を改むる能はず、そは彼は彼以外に善なる者あるを信ぜざ

ればなり、悪魔は否定者なり、拒み否むの外何事をも爲し得ざるものなり、故に彼に對するの道は唯放任あるのみ、彼をして思ふ存分に惡を行はしめ、而して自身躬ら惡の結果を味はしむるにあるのみ、然れども世に吾人の憐愍を惹くものにして此状態に陥りし者の如きはあらず、吾人は特に彼等のために祈り、吾人が彼等に善を爲し得る時機の到來を待つべきなり。(三七、一一)

基督信者の不落

世の愚者等は世の手段を以てして基督信者を殪し得べしとなす、彼等は神の事を知らず、故に基督信者の何たるかを知らざるなり、彼にして若し普通の人ならんか、彼の名譽を傷け、彼の生命を奪ひて、彼と彼の事業を毀つを得べし、然れども己を薦めずして神を説き、既に己れに死してキリスト彼に在りて活くる彼は世の手段を以てして殪し得べきものにあらず、イエス言ひ給ひけるは汝等この殿を毀ち見よ、我れ三日にして之を建てんと(約翰傳二章十九節)、基督信者を毀ち見よ、三年ならずして彼は榮光を纏ひて再び地の上に立たむ。(三八、一一)

讀者に問ふ

讀むことの如何に易くして、書くことの如何に難きよ、讀むこと

は食ふことにして費すことなり、書くことは作ることにして産することなり、百卷の書を讀んで一卷を著はし得ず、一日を消費して一行を草し得ざることあり、借問す、誌を讀むの士、句々皆な辛苦の情を知るや否や。(三八、一一)

養老の快樂

養老は義務なり、而かも亦大なる快樂なり、養老の快樂は育兒の快樂の如し、即ち弱を援くるの快樂なり、而かも養老は育兒に優りて遙かに神聖也、そは是れ將さに神の臺前に現はれんとする人に奉仕することなればなり、老人の身を敬ひて汝の神を畏るべし(利未記十九章三十二節)、養老は神を敬ふの一途なり、即ち日の老いたる者(但以理書七章九節)に仕ふることなり。(三八、一一)

ウエスレーとカント

十八世記の最大偉人はジョン・ウエスレーにあらずしてイマヌエル・カントなり、ウエスレーは地上に神の教會を建てんとせり、カントは人の良心に宇宙の大道を植ゑんとせり、我が上に[○]星[○]天[○]の[○]輝[○]く[○]あり[○]、我が衷に[○]道[○]義[○]の[○]蟠[○]ま[○]る[○]あり[○]と、ウエスレーは東奔西走して廣く道を傳へんとせり、カントは曾て一回も彼の居住の地より三十哩以外に出でしことなしといふ、ウエスレーは人類の愛

すべきを示し、カントは個人の貴むべきを教へたり、ウエスレーは廣くして淺かりき、カントは狭くして深かりき、人、各々其私淑する所あらん、然れども余輩はウエスレーに對するよりも、カントに對し、より大なる敬崇を拂ふもの也。(三八、三)

盜難に罹りて感あり 盜あり、我が虚に乘じ、我が貧家に忍入りて我所有の或物を奪去れり、人は我の不幸を傷はり、我も亦我が損失を歎けり、然れども我れ自己に省みて神の攝理を感謝して止まざりき、我の靈、塵に就し時に神は盜賊を送りて我が思念をして地を離れしめ給へり、賊は我が所有を獲たり、而して我は再び天國を獲たり、神に依頼みて盜賊も亦我をして貧ならしむる能はざる也。(三八、四)

『聖書之研究』の名と別る 今を去る五年前、余の始めて汝を此誌の題目として選じや、汝の我邦人に取り最も不人望なる名なるの故を以て余の成効を危まざる者はなかりき、然れども神の祝福は汝と余との上にありて、我等は星霜五年を重ねるも能く我等の地位を守るを得たり、而已ならず、變り易き此世は今や漸く汝の名の忌むべからざる者なるを知り、却て汝を迎へ、汝の指導を仰がんとするに至れり、

是れ又汝の勝利にして、余が汝のために深く喜ぶ所なり、而かも余は今汝と別れ、汝の指導に由て得し新光明に向て更らに進まんと欲す、即ち後に在るものを忘れ前に在るものを望み、神キリストイエスに由て上へ召して賜ふ所の褒美を得んとて目的に向ひて進まんとす、十四節、余は汝の名を愛するも汝の光輝の下に永く安靜を貪るを好まず、余は今より更らに暗中に入りて暗中の物を探り來らんと欲す。余や今汝の名を去るべし、然れども余は終生汝の實を離れざるべし、誰か汝の實を去りて其身安からん、聖書の研究は余が余の墓に下る時まで續けらるべし、余は今汝と別かるゝに及んで神の聖前に此事を汝に誓ふ。(三八、四) (編者曰ふ『聖書之研究』の名、一たびは之を去りて再び之を取戻せしは讀者の能く知る所なり。)

理想の發見

理想の人あるなし、理想の神に接して理想の人となるなり、理想の國あるなし、神の眞理を受けて理想の國となるなり、理想は人國の既有性にあらず、新たに神より受くべきものなり、我等全世界に理想の人と國とを求めて之を發見し得ざればとて敢て失望すべきにあらざるなり。(三八、七)

魔言の使用者 魔言を弄して喜ぶ者あり、然り、更らに進んで悪魔の預言者となりて語るべし、悪魔の言に奇抜なるものあり、以て斯世の人を喜ばすに足る、然れども知るべし、魔言は以て己を高め人を進むるの勢力にあらざる事を、魔言を弄して悪魔と共に苦笑するを得ん、然れども魔言を弄して晨星と共に歌ひ神の子等と皆な歡びて呼ばはること能はざるなり、魔言を弄するは其人の損失なり、彼は自ら好んで此事を爲す、余輩は彼の行爲を妨げず。(三八、七)

深切の取戻し 余は及ばずながら深切を爲すことを好む、深切を爲すことは無上の快樂である、之れを爲さないことは大なる苦痛である、然しながら余の深切が軟弱として解せらるる時に、或ひは人の歡心を買はんための策略として受取らるる時に、余は残念ながら余の與へし深切を取戻さなければならぬ、聖書に神は善人にも悪人にも同じく雨を降し給ふと書いてあるが、然かしまた汝等豚の前に汝等の眞珠を投げ與ふる勿れとも書いてある、人の與へんとする深切を濫用するが如き罪悪はないと思ふ、亦之を濫用された時の如き不愉快はない、我等は人が我等に施さ

んとする深切を濫用せざらんことを努むると同時に、亦我等の深切を亂雜に施與せざらんことに充分注意すべきである。(三八、八)

外交の重責 外交は公的生涯の最も顯著なる者なり、世界環視の中に國民の運命を議することなり、國に代て萬國の民に鞠かるることなり、是に所謂懸引なるものあるべからず、權謀術數あるべからず、恥づべき匿れたる事を棄て詭譎を行はず、神の道を亂さず、眞理を顯はして神の前に己をすべての人の良心に質することならざるべからず(哥林多後書四章二節)、輕躁浮虛の人は到底此重責に當る能はず、外交は技量よりも寧ろ品性を要す、基督教的紳士ならずして良き外交家たる能はざるなり。(三八、一〇)

人類の二種 人類に二種あり、唯二種あるのみ、紳士と惡徒、ゼントルマンとラッブル、是れのみ、禮を知り、信を重んじ、人を其弱きに乘じて攻めず、如何なる場合に處するも友の委託に叛かず、輕々しく怒らず、人の惡しきを思はず、足るを知て足らざるを憤らず、人に欺かる人も人を欺かんとせず、是れ紳士なり、彼の

富むと貧しきと、智者なると愚者なると、強きと弱きとは吾人の問ふ所にあらず。之に反し悪徒は禮を知らず、その好まざる人に向ては怨恨憎惡を表するを以て能事となし、破約背信を敢てし、人を其弱きに乗じて苦むるを好み、友を陥れ、之を賣り、容易く怒り、人の善を思ひ得ず、常に足らずして常に不平を唱へ、人を欺くに巧みにして、己れは韜晦の術に長ず、彼は悪徒なり、彼の貴族なると平民なると、博學なると無學なると、多才なると暗愚なるとは吾人の問ふ所にあらず。

吾人は前者を求め、後者を斥く、吾人は前者と偕に地上の天國を造らんとす、後者と相伍して世に勢力を張らんとせず、セントルマンは貧くも貴むべし、ラップルは富めるも賤むべし、悪徒は學あるも絶つべし、紳士は學なきも親み交はるべし、吾人は紳士の列に加はらんことを求めて悪徒の群を避くべきなり。(三八、一一)

沈黙と絶叫 神は金を造り給へり、又銀を造り給へり、神は沈黙を命じ給へり、又絶叫を命じ給へり、而して雄辯もし銀ならば沈黙は金なりといふ、銀を擇むものは擇むべし、然れども余輩は銀よりも多く金を擇む者なり。(三八、一二)

平民の友

若し神より詩人たるの天才を賜はらん乎、余はラルヅラスの如き平民詩人たるべし、若し政治家たるの才能を賜はらん乎、余はフランクリンの如き平民政治家たるべし、若し美術家たるの技倆を賜はらん乎、余はレムブラントの如き平民美術家たるべし、若し傳道師たるの天職を授からん乎、余はダビッド・ブレナーの如き隠れたる平民傳道師たるべし、余は所謂る偉人たるを好まず、巨人たるを嫌ふ、余は萬民と共に救はれずむば萬民と共に呪はれんことを欲す。(三九、三)

露國と米國

日本國に二大敵國あり、其第一は露國なり、彼は其併呑主義を以て外より我等を破壊せんとす、其第二は米國なり、彼は其物質主義を以て内より我等を腐敗せんとす、我等の軍人は劍を以て第一の敵を撃退せり、我等の宗教家は信仰を以て第二の敵を排攘せざるべからず。(三九、九)

今の批評

褒るは正義の故にあらず、恩義の故なり、貶すは罪惡の故にあらず、怨恨の故なり、今の批評なるものは私恩私怨の發表なり、世が之に些少の信をも置かざるは敢て怪しむに足らざるなり。(三九、九)

福音の進歩 猶太國に芽を萌せしキリストの福音は猶太國の滅亡と共に亡びず、羅馬に生長して羅馬の衰亡と共に衰へず、米國に繁茂して米國の墮落と共に墮ちず、今此日本に移植せられて新たに其發展を續けんとす、是れ日本國が他の諸國に優れて善且つ良なるが故にあらず、その神の田園に招かれしや遅くして他人の勞したる果を受けたれば也、吾人は謙遜以て吾人の任を全うし、吾人が受けし賜物を更らに完全に近き者となして、之を吾人の後進者に譲るべきなり。(四〇、一)

ゼントルマンの爲めやること

ゼントルマンは人を其弱さに乗じて苦めず。

ゼントルマンは人に惡意を歸せず。

ゼントルマンは人の劣情に訴へて事を爲さず。

ゼントルマンは友人の秘密を公にせず。

ゼントルマンは人と利を争はず。

ゼントルマンは人の深切を蔑にせず。

ゼントルマンは人の自由と平和を妨げず。

ゼントルマンは殺生を好まず。

ゼントルマンは自己を廣告せず。

ゼントルマンは自己の爲し得ることを他人に爲さしめず。(四〇、三)

利己的信仰

余輩は外國宣教師に非ず、又其雇人に非ず、又教會の牧師に非ず、故に余輩は人に信仰を哀求せざるなり、信ぜんと欲せば信ぜよ、信ぜざらんと欲せば信ずる勿れ、神なり、余輩なり、信仰なり、棄てんと欲せば自由に之を棄てよ、信仰は他人のために非ず、自己のためなり、信ずるは他人に恩を着せんが爲にあらず、人に對する怨恨を晴らさんが爲に神に對する信仰を棄つるが如きは之を愚の極と稱せざるべからず、而かも此類の事の決して尠少ならざるを如何せん。(四〇、八)

我と労働者

我れ労働者を使ふにあらず、我は彼と共に働らくなり、我れ彼に給金を拂ふにあらず、我が充を以て彼の缺を補ふなり、我と彼とは兄弟なり、我等は互に相援けて地の改良を計るなり。(四〇、一一)

余輩の同志者 余輩の同志者は日本國に於てはあらざる可し、米國に於てはあらざるべし、然れども思想の本源地たる歐洲に於てあり、キルケゴールあり、「科學と基督教」の著者なるベテックス氏あり、「宗教か神の王國か」の著者なるローツキ
 ー氏あり、何れも今の教會を離れてキリストの福音を唱ふる者なり、彼等の説く所は遙かに在來の宣教師の説く所よりも深くして強し、彼等は眞に初代の基督者の心を識りたる者なりと信ず、主もに英米の宣教師に由て基督教を聞きし我國の基督信者は是等明察の思想家に耳を傾くるを要す。(四一、二)

眞面目なる偽善者 偽善者に不眞面目なると眞面目なるとあり、前者は偽善と知りつゝ之を行ふ者なり、後者は眞理なりと信じて偽善を行ふ者なり、後者或ひは前者よりも愛すべき者なりとせん、然れども其身の危険より云へば後者の危険は遙かに前者のそれに勝る、不眞面目なる偽善者に覺醒の機會あり、然れども眞面目なる偽善者に至ては其悔改は期して待つべからず、世に扱ひ難き者にして眞面目なる偽善者の如きはあらざる也。(四一、二)

思想の昇進 余は初に己が身を立てんとせり、而して己が身を立てんとするに方て國のために盡すの必要を感じたり、茲に於てか利己主義の余は國を愛する者となれり。

而して國のために盡さんとするに方て余は人類のために盡すの必要を感じたり、茲に於てか愛國者なる余は世界主義者となれり。

而して世界人類のために盡さんとするに方て余は神のために盡すの必要を感じたり、茲に於てか世界主義者なる余は基督信者となれり。

利己主義に始まりてキリストの愛神愛人主義に終れり、是れ正當の順路なり、余は此の順序に循て終にキリストの御父なる眞の神に至るを得しを感謝す。(四一、二)

國のために祈る 愛國は唱へられて國は愛せられず、腕力は日々に加はりて意力は日々に萎縮す、敵を千里の外に破りて、内敵に自由の本城を渡せり、神よ、此國を憐み給へ、我等をして敵に對して強きが如く自己に對して強からしめ給へ、國として大なるが如く人として大ならしめ給へ、國に愈りて爾を愛して誠に國を愛

さしめ給へ、我等の間に多くの義人を起して此國の基礎を其民の堅固なる良心の上に築かしめ給へ、アーメン。(四二、二)

最善の思想 最善の思想は最初思想なり、天真の深き泉より爛漫として湧き出る思想なり、之に思考を加へて濁らざるを得ず、所謂深慮と稱し再思熟考して天真の思想は人爲の劣策と化す、最上の智慧は義人の本能なり、學者の提説に非ず、余輩が詩人を尊んで神學者を賤むは是れがためなり、民の聲を重じて政治家の議論を輕んずるも亦是れがためなり。(四二、三)

説の進歩 我に定説なしと云ふ者あらん、然り、我に固定せる説あるなし、我が説は常に生長す、我は既に多くの舊説を棄てたり、又今の説をも棄つることあらん、アブラハムの神イサクの神ヤコブの神は生ける者の神なりと云ふ、而して生ける者は絶えず生長す、我が説にして岩の如くに變らざる者ならん乎、我は死せる者にして我を保育する神も亦死せる神なり、活ける神に事ふる生ける者は日と共に新たならざるべからず、歳と共に進まざるべからざるなり。(四二、四)

余輩の賛成者 余輩にも亦余輩の賛成者あり、是れ高貴の人に非ず、教會の監督、長老又は執事又は傳道師に非ず、時には佛教の僧侶なり、多くは勞働の子供なり、何の政權をも握らざる者、又は何の義務をも余輩より要求せざる者なり、余輩は彼等の賛成を得て心甚だ強し、余輩は主イエスが彼等を以て余輩を賛成し給ひつゝあるを知る、彼と彼等との賛成ありて余輩は政府に嫌はるゝも悲まず、教會に憎まるゝも何の痛痒をも感ぜざるなり。(四二、六)

カーライルの葬式 貴きはカーライルの葬式なりき、ケルシーの彼の住家よりスコットランドの彼の墳墓の地まで彼の柩を送りし者は彼の親友僅かに三人、其一人は理學者チンダール、其第二者は歴史家レッキ、其第三者は弟子フルードなりき、彼等柩を守りて墓地に到れば之を迎へし者は少數の舊故なりき、牧師の其上に祈禱文を読む者なく、會集の其前に讚美歌を唱ふる者なかりき、傍に見る者は曰へり「茲に無神論者は葬られつゝあり」と、斯くて彼の肉はスコットランドの土に歸り、彼の靈は彼を造りし神に歸りたり、彼は不信者の如くに葬られたり、然れども彼は

神の忠僕として働らきたり、慕ふべきかなカライル、我も葬らるゝ時には亦彼の如くに葬られんことを。(四二、六)

人たるの特権 余輩は基督信者なるや否やを知らず、然れども余輩は一人の人なるを知る、而して人なるが故に余輩に大なる特権あり、余輩は神を父として呼ぶを得るなり、余輩はキリストを兄弟として愛するを得るなり、余輩は聖書を人類の書として究むるを得るなり、人たるの特権は大なり、此特権の余輩に供せらるゝありて、余輩は教會が供する洗禮、堅信禮、按手禮等、無意味の特権に與からんと欲せざるなり。(同二、九)

君子と戦士 温厚篤實の君子とは世が仰で以て敬慕して歎まざる所の者なり、然れども進歩の先陣に立て能く人類を光明の域に導きし者は多くは斯かる圓滿無謬の人士にあらざりしなり、其敵を犬よと呼びしパウロなり、豚よと罵りしルーテルなり、或ひは瑕瑾枚擧するに違あらざりしルソーなり、荆棘は彼等に由て除かれ、迷信は彼等に由て壞こぼれたり、温厚篤實の士は教會の監督として價値あらん、牧師

長老傳道師として有益ならん、然れども信仰の戦士としては無能なる場合多し、愛に勵されて行爲の完全を省みるの違なき者にあらざれば光明の先驅者たる能はざるなり。(四二、九)

我が信ぜざる事 我は教會の教權を信せず、我は永遠の刑罰を信せず、我は天啓の終熄を信せず、我は無謬の聖書を信せず、我は戦争の永續を信せず、我は罪惡の不滅を信せず、我が信ずる事は多し、然れども信ぜざる事も亦尠からず、而して我は神と宇宙と人生とに關しすべての善事を信ずる其熱心を以て、是等に關するすべての惡事を全然信ぜざらんと欲す。(四二、一〇)

感化の功績 先生に教を受けしが故に斯んな目に遭ひたりと言ひて余輩を恨む人もある、先生に道を聽きしが故に斯かる境遇に陥りしと雖も能く之に堪ゆることが出来ると言ひて余輩に感謝して呉れる人もある、余輩は所謂先生なる者の實際世に役に立つ者なるや否やを知らない、然しながら若し役に立つ者であるとするれば、それは先生の如何に由るよりも寧ろ弟子たる者の如何に由るのであると思ふ、キリ

ストさへも

汝の信仰汝を救へり

と言ひ給ひて救済の功を常に其弟子に歸し給ふた、況して余輩に於てをやである、余輩の缺點多きを以てして到底人を感化するなどといふことは出来ない、然れども若し人ありて余輩を利用し、余輩に學ばずして余輩の傳ふる神に學ぶならば、或は余輩と雖も多少人生を益することが出来るであらうと思ふ、余輩は人に余輩の感化力を唱へらるゝ時に、慚汗背を潤して身は地下に入りたく思ふを常とする。(四三、四)

最後の一圓

我に神より賜はりし少許すこしばかりの所有あり、我れ之を將て救世の陣頭に臨む、我に人よりの後援あるなし、唯天よりのマナの日日に供せらるゝあるのみ、我が敵は強くして我が糧は少し、我れ時には降旗を擧げんことを思ふ、時に聲あり我を勵まして曰ふ

最後の一圓を投ぜよ、而して後に休むべし

と、我れ此聲を聞て再び起つ、之に答へて曰ふ

我れ汝の恩恵によりて爾かなさん、……と。(四三、四)

福音の反證

處世の方便として福音を信じ、而して其目的を達すれば直に之を廢棄す、而して獨り心の中に言ふ、我れ最早福音を要せず、獨り成功の途を歩むを得べしと、然れども神は慢るおぼたべき者に非ず、福音は之に頼れば救拯すくひの巖いははたるべく、之に反けば躓つまず礎いの石たるべし、福音は背反者を粉碎して其眞理たるを證明す、而して余輩は福音反證の實驗に供せらるゝ者の尠すく少ならざるを見て甚だ悲む。(四三、五)

坊主根性

富者よりは金を貰はんと欲し、權者よりは權を藉らんと欲し、識者よりは知識を貰はんと欲し、信仰家よりは信仰を貰はんと欲す、貰はんと欲す、貰はんと欲す、坊主根性は乞食根性なり、忌むべく、避くべく、斥くべきは此坊主根性なり。(四三、五)

注文の謝絶

我誌に對し多くの注文あり、余輩にも亦余輩自身の注文あり、然れども余輩は自他孰れの注文にも應ずる能はざるなり、神に使はるゝ者はすべて知らん、人は望んで其欲する所を爲す能はざることを、小なりと雖も我誌も亦神の業

なり、故に神の命に應じて成る者にして、人の注文に應じて就る者にあらざるなり、我が書し、所すてに書したりとのピラトの言は、すべて神聖なるべき記者の言たらざるべからざるなり。約翰傳十九章廿二節。(四三、五)

日本國の祈求

我れ曾て異郷に在り、綠陰樹下に獨り跪て神に祈りて言へり

神よ、我れ日本國を興へ給へ、日本全國を興へ給へ、我は之よりも小なる者を爾に乞はず、又之よりも小なる者を以て満足せざるなり

と、時に聲あり、我に應へて曰く

汝が乞ふ如く爾にあらん

と、然るに我れ故國に歸りてより茲に二十有餘年、我が祈禱は少しも聽かれず、我は依然として故の我れなり、小にして勢力なき故の我れなり、我れ故に心の中に意ふて言へり

我は迷ひし乎、神の聲と想ひしは夢なりし乎

と、時に又聲あり、我懷疑を打消して言ふ、

然らざるなり、我は眞に汝の祈禱を聽けり、我は實に日本國を汝に興へんと欲す、汝の生命を其ために獻げよ、然らば日本國は汝の有たるべし

と、我れ其聲に應へて曰く

誠に然り、我は誤れり、我は未だ日本國を我に要求するの資格なし、神よ、願くは我を助け給ひて、我をして終りまで之を愛し、之がために我全生命を獻ぐるを得て、之を我が有となすを得しめ給へ

と、而して後、我は我が心の中に大なる平和を感じたり。(四三、六)

トルストイ翁を用ふ トルストイ翁逝く、親しき老ひたる十九世紀と別る、の感あり。

彼れ在りて戰に敗れし露國は尙ほ世界の重鎮なりき、彼の如き者なくして戰に勝ちし日本に向遜色ありたり、而して今や此人逝く、二國の勢力に異動ありしを覺ゆ。

翁の忌み嫌ひし者に二箇ありたり、其一は戰爭なりき、其二は教會なりき、彼は戰爭を嫌ひしが故に戰爭を賛成せし教會を嫌ひしなり。

教會は彼を破門したり、而して彼れ死するも教會に屈從せざりしとの理由を以て彼がために哀悼式は行はれず、彼の遺骸は教會の援助なくして、ヤスナヤボリアナなる彼の邸内の丘上に葬られたり、幸ひなる哉翁よ、彼と情性を共にせしカーライルも亦教會の援助を藉りずして蘇國なる彼の墳墓の地に葬られたり、彼と等しく教會を惡みしキールケゴールも亦牧師の慰藉を斥けて死せり、教會はトルストイを破門して、神は教會を破門し給へり、恁かる神の忠僕を破門せざるを得ざりし教會の運命は既に定まれりと言ふべし。(四三、一二)

希望と長命 失望する勿れ、長く生きんとせよ、是れ長く樂まんがためでない、長く世の不幸者を助けんがためである、而して又人世最大の快樂は己れよりも不幸なる者を助くることである、世に生くるの甲斐なき生涯とてあるべき筈はない、自暴自棄は最大の罪惡である。(四三、一二)

感想十年終

大正三年十二月十二日印刷
大正三年十二月十五日發行

『感想十年』奥附

正價九拾錢

著者 内村鑑三

東京府豊多摩郡淀橋町大字柏木九百拾九番地

發行兼印刷人 山岸壬五

東京府豊多摩郡淀橋町大字柏木百拾參番地



印刷所 株式會社 秀英舎第一工場

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

東京府豊多摩郡淀橋町大字柏木九百拾九番地

發行所

聖書研究社

内村鑑三 著

内村鑑三 著
上野三造 著

所感
十年

定價 壹圓
郵稅 八錢

所感數百篇を集ひ、真理の直覺なり、天國の瞥見なり、信者の朝の夢なり、故に簡單なり、隨筆的なり、然れども著者が靈感の熟したる果實の芳味豊かなるものあり。

研究
十年

定價 壹圓
郵稅 八錢

基督教の重大なる問題數十目を捕へて之が研究の結果を發表す、實驗を基礎とし學究と祈禱と恩恵と三者相俟つて生れたるもの、靈の糧として充分の價值あらん。

宗教と
現世

定價 壹圓
郵稅 八錢

宗教、現世、非戰に する論文三十餘篇を收ひ、信者が修養に資する處あると共に、信者以外の者が基督教の精神を知るに好適の書なり(警醒社發行)。

平民
詩人

定價 五錢
郵稅 六錢

ホイットマン、テニソン、ウナルヅラス等六大詩人を紹介す、自ら讀で純潔正大の思想を得べく、人に贈りて無限の慰藉と奨勵とを供すべし(警醒社發行)。

發兌

(又は受)

東京淀橋
柏木九一九

(振替東京
七四九八)

聖書研究社

327
234

187

終

